

ゴーゴリの『鼻』における鼻失踪事件の日付と固有名詞変更の謎

Загадки даты исчезновения носа и изменения собственных имен действующих лиц в повести Н.В. Гоголя «Нос»

井上 幸義
Inoue Yuki Yoshi

Повесть Н. В. Гоголя «Нос» начинается с происшествия, случившегося 25 марта. Это число ассоциируется либо с праздником Благовещения, либо с апокалиптическим событием 25 марта 1492 года, когда в соответствии с древними пасхалиями, должен был наступить Страшный Суд, либо с Казанским собором, где государственным указом российский чиновник Петербурга обязывался быть на богослужении. Но эта дата появилась только в первом собрании сочинений 1842 года. До этого в других редакциях Гоголь использовал другие числа, которые, естественно, не связаны не только ни вышеизложенными гипотезами, но и ни с какими другими христианскими праздниками и событиями. Иначе говоря, такими факторами невозможно объяснить причины изменения дат в редакциях. В «Носе» есть и предложения, в которых Гоголь намеренно менял порядок слов, который решительно противоречит пониманию предложений с нормальным порядком слов. В настоящей статье проблема дат происшествия и необычного порядка слов предложений рассматривается с точки зрения ритмики и стилистики, что позволяет также разрешить загадку изменения собственных имен действующих лиц повести.

0. はじめに

ニコライ・ゴーゴリの中編小説『鼻』は、出世に奔走する8等官の主人公コヴァリョフの顔から、ある朝突然鼻が失踪し、コヴァリョフより地位

の高い5等官の身なりで現われるとコヴァリョフを翻弄した挙句、また突然もとの場所におさまるといふ、ゴーゴリの作品の中でもとりわけ幻想的で奇想天外な作品である。『鼻』は、「3月25日、奇怪このうえない事件がペテルブルクで発生した」といふ文で始まり、その日の朝早く目覚めた床屋のイヴァン・ヤーコヴレヴィチが朝食のパンの中からコヴァリョフの鼻を発見するという事件から物語が展開していく。「何年の」が示されぬこの3月25日という日付は、ヴァイスコプフ、グリヤンツ、ディラクトールスカヤなどの研究者によってさまざまな解釈がなされ、さまざまに意味づけされてきた。本稿では、これらの先行研究に対し、3月25日（Марта 25 числа）で始まる文全体を音律法と音の反復の視点から考察する。またこの作品では規範的でない語順の文が散見され、さらに登場人物の固有名詞が手稿の段階で変更されたり、出版されたテキスト中でさえ途中から別名に変わったりしているが、これらの理由が、やはり音律法と音の反復に関係していることを明らかにしていく。¹

1. 「3月25日」の解釈と意味づけ

(1) 「生神女福音祭・聖体礼儀」説

ミハイル・ヴァイスコプフ（Вайскопф М.Я.）は、旧暦（ユリウス暦）の3月25日が、ロシア正教の十二大祭のひとつ「生神女福音祭」（受胎告知。カトリックの「お告げの祭日」にあたる）の引喩であり、床屋のイヴァン・ヤーコヴレヴィチが食卓で行う一連の動作が、生神女福音祭の朝から行われる「聖体礼儀」（Божественная Литургия）の第一部である「奉献礼儀」（Проскомидия）の儀式そのものであるとしている〔Вайскопф 2002: 323-329〕。聖体礼儀とは、正教で最も中心的な奉神礼で、イイス（イエス）の血と体である御聖体（パンとぶどう酒）をいただく儀礼のことであり、カトリックの「聖体祭儀」、プロテスタントの「聖餐式」に当たるが、その内容と意味はそれぞれ異なる。聖体礼儀の第一部である奉献礼儀では、

1 本稿は、2009年10月1日・2日にオデッサ国立大学（ウクライナ）で開催された第12回「ロシア学と現代」国際シンポジウムで口頭発表した Загадка даты происшествия в повести «Нос» – Ритмико-звуковой и стилистический анализ повести Н. В. Гоголя «Нос» に基づき、加筆修正したものである。

司祭と補祭が祭服に正装し、聖パンとぶどう酒を用意し、聖パンをナイフで切って真ん中の一部を取り出し、信者に分け与える準備をする。奉献礼儀は、至聖所の中で門（王門）を閉ざして行われるため、一般の信者がこの儀礼を目にすることはできない。ヴァイスコプフが指摘するように、イヴァン・ヤーコヴレヴィチの振る舞いは、いくつかの点で、ゴーゴリ自身が一般大衆のために祈祷・儀式の意味を明らかにしようとした未完の啓蒙書『聖体礼儀考』（Размышления о Божественной Литургии）²に記された儀礼と一致する。

『鼻』：「イヴァン・ヤーコヴレヴィチは礼儀上シャツの上から燕尾服を着込んだ」

『聖体礼儀考』：「司祭と輔祭は……（中略）祭服を完装する」

『鼻』：「パンを半分に切り分け、真ん中をのぞき込むと……（中略）ナイフで慎重にほじり……（中略）ひっぱり出した一鼻だ！」

『聖体礼儀考』：「司祭は聖パンに十字型の切れ目を入れ……（中略）切り出された真ん中を聖^{せい}戈（両刃のナイフ）で持上げる」

イヴァン・ヤーコヴレヴィチが「礼儀上」燕尾服を着込んだとは、誰に対する、あるいは何に対する礼儀なのか。一見すると、自分が尻に敷かれている妻に対してと読めるが、表面上のこの個人的な礼儀に隠れて、祭服を完装するという聖体礼儀の深層の礼儀があり、これら相對する二重の層が、俗と聖とのずれを際立たせている。このずれは、笑いを引き起こすと同時に、このあとパンの中から鼻が発見されるという事件の幻想性を予感させている。

ヴァイスコプフが指摘している箇所以外にも、例えば、「ナイフを手にとると、意味ありげな顔つきでパンを切りにかかった」というくだりは、

2 ゴーゴリは、1836年の『鼻』の出版の後、1843年から1844年頃『聖体礼儀考』の構想を練り、匿名で出版するつもりだったようだが果たせず、その死後原稿が発見され、1857年に出版された。『聖体礼儀考』は、ソ連時代には宗教的文書であるという理由から科学アカデミー版のゴーゴリ全集（1937～1952年）にも収録されず、ソ連邦崩壊直前の1990年によく Современник 社からリプリント版が出されると、同年、雑誌《Наше наследие》の第5号にも掲載された。

日常の単なる食事にしては大げさであり、この儀式の神聖さを暗示していると考えられる。また、『鼻』の書かれた19世紀前半では、役人以外の職業の人々の仕事着兼普段着はフロックコートが一般的であり³、燕尾服を着るのは不自然でおおげさであった。普段着として燕尾服を身にまとうイヴァン・ヤーコヴレヴィチが「一度もフロックコートを着たことがなかった」という断り書きも、この儀礼性を裏付けている。以上から、この一連の動作が聖体礼儀、とりわけ奉献礼儀の引喩であることは明らかである。ヴァイスコプフがはじめて聖体礼儀引喩説を唱えたのは1993年であったが、それまで研究者の間で聖体礼儀との関係が注目されてこなかったのは、ゴーゴリの『聖体礼儀考』がソ連時代には宗教的作品ゆえに出版されなかったことに起因しているだろう。現代を代表するゴーゴリ研究者のひとり、イーゴリ・ゾロトゥースキー（Золотусский И. Г.）は、Ramber Media Groupのインターネットサイトにおいて、ポストソ連時代の最も際立ったゴーゴリ研究は何かという問いに対し、現在刊行中の23巻本のゴーゴリ全集（2001～）⁴を挙げ、その理由として、ソ連時代のゴーゴリ全集に収録されなかった『聖体礼儀考』や祈祷文が収録されたからであると述べている⁵。

しかし、イヴァン・ヤーコヴレヴィチの振舞いが聖体礼儀の引喩だとしても、それが直接3月25日の生神女福音祭に結びつくかどうかは疑問の余地がある。それは、ひとつには、聖体礼儀そのものは、生神女福音祭を含む十二大祭だけでなく、毎日曜日にも行われるものであるからであり、もうひとつには、出だしの3月25日という日付は1842年の『ゴーゴリ作品集』ではじめてもたらされた日付で、それ以前に書かれた『鼻』の最初の自筆完成原稿（1833～1834年）や『鼻』がはじめて掲載された雑誌『現代人』（1836年）では、いずれもイヴァン・ヤーコヴレヴィチの一連の振舞いはそのままに、それぞれ出だしの日付は2月23日と4月25日だったからである。すなわち、少なくとも『現代人』までは生神女福音祭が想定されていなかったことは明らかである。この点については次章「『鼻』の各異稿における事件の日付」で詳細に検討する。

3 Энциклопедический словарь российской жизни и истории XVIII – начало XX в., С. 770

4 Гоголь Н.В. Полное собрание сочинений и писем: в 23 томах. – М., 2001–. 全23巻のうち、本稿執筆時点で出版されているのは、第1巻と第4巻の2巻だけであり、『聖体礼儀考』は未刊。

5 <http://www.lenta.ru/conf/zolotussky/> (25/11/2009)

(2) 「1492年3月25日のキリスト再臨騒動」説

ヴラディーミル・グリヤンツ (Глянц В. М.) は、ヴァイスコプフの聖体礼儀引喩説の妥当性を認める一方で、生神女福音祭を連想させる3月25日の日付が1842年の『ゴーゴリ作品集』ではじめて持ち込まれたものであることを指摘しながらも、それ以前の異稿における日付が何を意味するかについては全く触れていない。しかも、グリヤンツは、ヴァイスコプフと同様に3月25日という日付にとらわれ、1492年3月24日から25日の夜半にかけて起きたキリスト再臨騒ぎという黙示録的な意味をゴーゴリが『鼻』に付け加えた可能性があるとしている [Глянц 2004: 24]。ロシア正教では、聖書の天地創造を基準とする世界創造紀元がとられ、西暦紀元前5508年に当たる年を元年とするため、西暦1492年はちょうど7000年に当たる。グリヤンツは、この再臨騒動説の根拠として、ゴーゴリの親しい友人であるステパン・シェヴィリョフ (Шевырев С.П.) が著した『ロシア文学史、とりわけ古代に関する』(История русской словесности, преимущественно древней) に記された「1492年3月24日から25日の生神女福音祭にかけての夜半に、ノヴゴロドやモスクワの信者たちは、恐れおののきながらキリストの再臨と最後の審判を待ち受けていた」という事実をゴーゴリが知っていた可能性が大きいことを挙げている。だが、たとえゴーゴリがこの事実を1842年の自身の作品集の時点で知っていたとしても、シェヴィリョフがこの著作を出版するのは、それより後の1846年から1860年にかけてであり、1842年版の『鼻』の一般読者がこの騒動を知っていたかどうかは疑問の余地があり、したがって、キリスト再臨・最後の審判がそもそも引喩になりえたかどうかは問題が残る⁶。

6 *Каравашкин А.В., Юрганов А.Л. Опыт исторической феноменологии. Трудный путь к очевидности. М., 2003, с. 76*によれば、15世紀当時のロシア正教のパスハリア (復活祭とそれに関連する暦の一覧) には、最後の審判があると信じられた7000年 (西暦1492年) までしか暦が記されておらず、当時の人々は、迫りくる最後の審判に恐怖と不安をつのらせていた。しかし、この最後の審判にまつわる当時の世相を詳述している同書でも、3月24日から25日にかけての騒動については言及されていない。かりに、19世紀のゴーゴリの同時代人が15世紀当時の不安な雰囲気を知っていたとしても、7000年の3月24日から25日にかけての騒動そのものを知っていたかどうか、逆に3月25日という日付からすぐに7000年 (西暦1492年) を連想できたかどうかは、疑問の余地が残る。

(3) 「カザン大聖堂における、官吏の生神女福音祭奉神礼参列義務」説

オリガ・ディラクトールスカヤ (Дилакторская О.Г.) は、コヴァリョフが自分の鼻と対面する場所としてカザン大聖堂が選ばれたのは、当時ロシアの官吏は生神女福音祭の日に教会の奉神礼に参加することを国家の令によって義務付けられていたからであり、ペテルブルクにおいて官吏が奉神礼の義務を課せられた教会がカザン大聖堂であったからであるという説を唱えている [Дилакторская 1984: 155]。この奉神礼参列義務説も、3月25日を根拠としているが、2月23日で始まるゴーゴリの最初の自筆完成原稿ですでに出会いの場所がカザン大聖堂に定められていたことや、さらに、ゴーゴリは、『現代人』に発表する以前に最初に掲載を考えていた雑誌『モスクワの観察者』の出版人のひとりミハイル・ポゴージン (Погодин М.П.) に宛てた手紙⁷で、カザン大聖堂が検閲で通らなければカトリックの教会に変更してもよいと書いていたことなどから、この説は説得力をもたない。結局、ゴーゴリの見通しは甘く、『現代人』への掲載に当たっては、カトリックの教会への変更も認められず、巨大商店街であるゴスチーヌィ・ドヴォールに変更せざるを得なかった。そもそもゴーゴリがカザン大聖堂を第一に考えていたのは、コヴァリョフと鼻という俗物同士が、神聖な大聖堂で出会うというずれ、俗と聖との衝突が引き起こす幻想性と笑いを狙ったからであろう。

以上3つの説は、いずれも3月25日を根拠としているが、3月25日という日付は、1842年の『ゴーゴリ作品集』ではじめて持ち込まれたものであり、初出の『現代人』(1836年発行)を含むそれ以前の異稿では、別の日付が選択されていた。したがって、これらの日付は、生神女福音祭とも、1492年3月25日のキリスト再臨騒動とも、カザン大聖堂における奉神礼参列義務とも直接関係しないことになる。換言すれば、これらの要因からさまざまな日付を選択した理由を説明することはできない。また、どの説も3月25日以外の日付の意味を考察していない。ボリス・ウスペンスキー (Успенский Б. А.) は、1832年の最初の草稿で『鼻』の主題と構成が決められてから1842年の作品集に至るまでの「10年間のテキスト執筆作業は、

7 ゴーゴリはポゴージン宛に手紙(1835年3月18日付け)と『鼻』の原稿を送ったが、雑誌「モスクワの観察者」はこの作品の内容があまりに下品であるとして掲載を見送った。『鼻』がようやく『現代人』第3号に掲載されたのはその1年以上も後のことであった。

鼻の事件に対する作者の態度を決定する動機付けを捜し求めることに尽きた。この動機付けは、結局のところ、事件が起きた時日に関係していたのだった」と記している [Успенский 2004: 60]。しかし、この動機付けがそれぞれの異稿の日付とどのように関係しているのかという根本的な問題は触れられず、これらの日付がなぜ選択されたのかという原因に対する答えも出されないままとなっている。以上を踏まえ、各異稿で日付が変更された理由について考察を試みよう。

2. 『鼻』の各異稿における事件の日付とその意味

2-1. 各異稿における事件の日付

『鼻』がはじめて発表されたのは、1836年の『現代人』第3号であるが、その後1842年の『ゴーゴリ作品集』に出だしの日付と終局が変更された『鼻』が掲載された。これらのテキスト以外にも3つの自筆原稿が残されている。

- (1) 1832年の末から1833年の初めにかけて書かれたと考えられる、本作品の冒頭部分の草稿（ノートの第6ページの上半分にだけ記載されたもの）（以下、最初の草稿と称す）。
- (2) 1833年から1834年に書かれたと考えられる最初の自筆完成原稿（7枚の半紙に記されたもの）（以下、最初の自筆完成原稿と称す）。
- (3) 1835年3月に書かれたと考えられる自筆清書原稿の最初の1ページ（以下、自筆清書原稿と称す）。

最初の草稿から1842年の作品集までのほとんどで、冒頭の日付が異なっている。これらの異稿の最初の一文を比較検討してみよう。

- (1) 最初の草稿（1832年末～1833年初め）

«23 числа 1832-го года случилось в Петербурге необыкновенно-странное происшествие». (1832年23日に奇怪このうえない事件がペテルブルクで発生した。)

この異稿では、年月日のうち月だけが示されていない。

- (2) 最初の自筆完成原稿（1833年～1834年）

«Сего февраля 23 числа случилось в Петербурге необыкновенно-странное

происшествие». (今年の2月23日に奇怪このうえない事件がペテルブルクで発生した。)

(3) 自筆清書原稿 (1835年3月)

«Сего февраля 23 числа случилось в Петербурге необыкновенно-странное происшествие». (今年の2月23日に奇怪このうえない事件がペテルブルクで発生した。)

(4) 『現代人』 (1836年)

«Сего Апреля 25 числа случилось в Петербурге необыкновенно-странное происшествие». (今年の4月25日に奇怪このうえない事件がペテルブルクで発生した。)

(5) 『ゴーゴリ作品集』 (1842年)

«Марта 25 числа случилось в Петербурге необыкновенно-странное происшествие». (3月25日に奇怪このうえない事件がペテルブルクで発生した。)

上記の、3月25日以外の日付 (1832年23日、2月23日、4月25日) は、いずれもロシア正教の祭日とも出来事とも関係がない。したがって、これらの日付そのものは宗教的な引喩の意味を含んでいないと考えられる。しかし、日付とは無関係に、聖体礼儀の引喩は、最初の自筆完成原稿にはっきりとした形で描かれているだけでなく、それ以前に書かれた最初の草稿でもすでに仄めかされている。この草稿では、床屋のイヴァン・イヴァーノヴィチ⁸は、朝目覚めて「燕尾服を着込み」、パンを「裂くと」(переломил) そこに鼻を発見する。ロシアでは、農作業など野外での食事のときにパンを「裂いて」食すことはあっても、食卓ではパンは「切る」のが普通であり、その点でイヴァン・イヴァーノヴィチがパンを切らずに「裂いた」のは不自然で、何らかの意味を暗示していると考えられる。そもそも聖体礼儀は聖福音(福音書)の「機密制定の晩餐」(最後の晩餐)

8 最初の草稿では、床屋の名前は当初イヴァン・イヴァーノヴィチであったが、途中からイヴァン・フォードロヴィチに変更され、さらに最初の自筆完成原稿で最終的にイヴァン・ヤークコヴレヴィチに変更された。この名前の変更の理由については、本稿で後述する。

に由来しており、その晩餐のおり、イイススはパンを取って祝福してこれを「^ま撃き」、門徒たちに与えながら、これは「^{われ}我の^{たい}體」であると言ひ、爵（^{しやく}杯）を渡してぶどう酒を「^{われ}我の^{しんやく}新約の^ち血」であると言った⁹。ロシア聖書協会版ロシア語訳聖書では、「^ま撃き」はいずれの箇所も無充音の語 преломил であり¹⁰、ゴゴリは、これと同じ意味を表わす充音の переломил を最初の草稿で使っているのである。つまり、ゴゴリは、聖書のことばを借りて、パンを「裂く」（переломил）という語に儀礼性、機密制定の引喩を込めたのであろう。それに対し、それ以降の異稿では、礫のイイススを突いた槍の穂先の表象といわれる^{せい}聖^か支（^ふ両刃のナイフ）で聖パンを「切る」聖体礼儀の儀礼性をよりはっきりした引喩として含ませたと考えられる。ここでも、俗人イヴァン・ヤーコヴレヴィチが神聖な儀式を執り行うというずれ、俗と聖との衝突が笑いを引き起こす。逆に言えば、ゴゴリが聖体礼儀の引喩を忍び込ませたのは、俗と聖とのずれによる笑いを生み出すためであったのだろう。

一方、これら最初の一文は、いわゆる小説の巻頭文であるが、構文論的な観点から検討してみると一般的な巻頭文とは異なる特徴的な語順（部分的な倒置）をとっていることが分かる。巻頭文は、小説の出だしであるので、一般的に文脈がない文であり、ロシア語では、通常、状況限定詞（детерминант）を含む文脈非依存型不分割文（контекстуально независимые и коммуникативно нерасчлененные предложения）となる。科学アカデミーの80年版『ロシア語文法』《Русская грамматика》が規定しているように、状況限定詞を含む文脈非依存型不分割文の一般的な中立語順は、「状況限定詞グループ+述語グループ+主語グループ」である [Русская грамматика 1980: 197-198]。この規定にしたがえば、『鼻』の巻頭文のしかるべき中立語順は、最初に時間の状況限定詞（детерминант）《какого-то числа》（～月～日に）、次に場所の状況限定詞《в Петербурге》（ペテルブルクで）、次に述語《случилось》（発生した）、最後に主語《необыкновенно-странное

9 日本正教会翻訳『我主イイススハリストスの新約』（正教本会版）1985年より、マトフェイに因る聖福音第26章26-30、マルコに因る聖福音第14章22-26、ルカに因る聖福音第22章15-20、コリント人に達する前書第11章23-25。

10 От Матфея 26:26-30, От Марка 14:22-26, От Луки 22:15-20, 1-е Коринтянам 11:23-25. // Библия: Книги Священного писания Ветхого и Нового Завета (в русском переводе с параллельными местами и приложениями). - 2006.

происшествие» (奇怪このうえない事件が) という語順をとるはずである。すなわち、「*какого-то числа в Петербурге случилось необыкновенно-странное происшествие*» (～月～日にペテルブルクで奇怪このうえない事件が発生した) という文になるはずである。

ところが、すべての異稿で、出だしの一文は、最初に「*какого-то числа*» (～月～日に)、次に「*случилось*» (発生した)、次に「*в Петербурге*» (ペテルブルクで)、最後に主語「*необыкновенно-странное происшествие*» (奇怪このうえない事件) という同一語順をとっている。

では、なぜゴーゴリは、異稿ごとに日付を変えながらも、すべての異稿でこの語順、つまり、「*случилось*» (発生した) を「*в Петербурге*» (ペテルブルクで) の前に置く部分倒置語順をとったのであろうか。ここで注目すべきは、イントネーションと意味との関係である。このような部分的な倒置をとともなう文は、表現力の強い文 (экспрессивный вариант) となり、必ずふたつのシンタグマ、すなわち、ふたつのイントネーション的・意味的単一体に分割され、「そこでは、イントネーションの中心は、文全体の最初と最後のアクセント音節に置かれる」[Там же: 203]。この法則にしたがえば、『鼻』の冒頭の文のシンタグマは、時間の限定詞「*какого-то числа*» (～月～日に) と倒置された述語「*случилось*» (発生した) との間でふたつに分割され、イントネーションの中心は「*какого-то числа*» (～月～日に) と「*происшествие*» (事件) に置かれる。この部分倒置文は、読み手、すなわちテキストを朗読する聴き手の注意を「日付」と「奇妙な事件」に向けさせることになる。つまり、とりわけアクセントが強調して発音される「日付」は何らかの意味をもたされていることになる。

ゴーゴリ作品におけるリズムと音の重要性を指摘した文学者や研究者はこれまでもいる。アンドレイ・ベールィ (Белый А.) は「こと散文の分野ではプーシキンは自分の注意をリズムからそらそうとしたが、ゴーゴリはリズムが与えてくれる叙情の振幅のすべてを散文に注ぎ込んだのだ。母音反復や子音反復の音を生み出す語句を、張られた弦のように打ち震わせることによって」と記している [Белый 1934: 5]。ベールィは、リズムと音反復が結合した一例としてゴーゴリの『5月の夜』の叙情的なレチタチーボを分析しているが、その中で「メロディーというものに、形象も、表現も、シンタクスも、またプロットでさえも従属している

のだ。第一相の理念は、リズムである」と指摘している [Там же: 226]。ベールィによれば、「韻律によって散文が規定されうることはない。しかし、個々の、ばらばらに採られた韻律は散文の中に広がっていくのだ。ゴーゴリを読んでいると、思わず口を衝いて出てしまう。ほら、ヤンプ (弱・強格)だ、ほら、アンフィブラーヒー (弱・強・弱格)だど。韻律はメロディーの要素なのだ」[Там же: 220]。ボリス・エイヘンバウム (Эйхенбаум Б. М.)によれば、「ゴーゴリは、多くの同時代人が証言しているように、自作を朗読する特別な才能に恵まれていた。ゴーゴリの朗読では、ふたつの主な手法が際立っていた。ひとつは、情熱的で歌うような朗読法であり、もうひとつは、演技、独特な擬態的な語りであった」[Эйхенбаум 1969: 307-308]。エイヘンバウムは、ゴーゴリのテキストの基礎は語りであると規定し、「語と文が選択され結び付けられる際の原理となっているのは、論理的なことばだけでなく、むしろ、それ以上に、表現力のあることばなのだ。そこでは、アーティキュレーションや身振りや音のジェスチャーなどに特別な重きが置かれるのだ」と述べている [Там же: 309]。ミハイル・ギルシュマン (Гиршман М. М.)によれば、「ゴーゴリ作品のリズムの中では、ふたつの相異なる要素が、内部矛盾を起しながらも統一されてしまう。ひとつは、散文らしい多面的容貌や多弁ぶりであり、もうひとつは、詩的で主観的な「個人の口調」が抜け出して独立していることである」[Гиршман 1982: 291]。

以上のように、何人かの文学者や研究者によってゴーゴリの散文におけるリズムや音の重要性は指摘されているが、このような観点からの『鼻』の分析も、冒頭の日付の意味づけも未だ試みられていない。そこで、次節では、『鼻』の冒頭文の異稿を、順に、リズムと音の点から分析し、特にアクセントが強調して発音される「日付」の意味を探ることとする。

2-2. 各異稿における事件の日付の意味

(1) 最初の草稿

23 числа 1832-го года

*(Двадцать третьего числа ты́сяча восемьсо́т три́дцать второ́го го́да)
случи́лось в Пе́тербу́рге необыкнове́нно-стра́нное прои́шествие.*

以下、弱音節は U の記号で、強音節は _ の記号で表す。

_U | _U | UU | _ | UU | UU | _ | UU | _U | _U || 10脚

U | UU | U | UU | UU | U | U | UU | UU | _U U 10脚ヤンプ(弱・強格)
(1832年23日に奇怪このうえない事件がペテルブルクで発生した。)

最初の草稿でも、その他の異稿と同様に、日付はアラビア数字で表されているが、強音節と弱音節を明示するために、これらの数字をロシア文字でカッコ内に表示することにする。最初の草稿の冒頭文では、ふたつのシタグマは、どちらも同じ詩脚数(10脚)、ほとんど同じ音節(それぞれ20音節と21音節)からなっており、どちらのシタグマにもディピリーヒー(弱・弱・弱・弱格)が含まれている。その結果、ふたつのシタグマにおける朗読の速度はほとんど等しいことになる。ペールィが指摘しているように、「散文のリズムというのは、複雑なドーリニック詩形に一番近い¹¹。つまり、音節の抜け落ちによって生み出される休止の時間が、抜け落ちた音節の発音時間に等しいような詩行に近いのである... (中略) 余剰音節が増えると、発音が加速されることになる。例えば、多音節の《вывороченная》(引き抜かれた)という語は速く発音されるのだ」[Белый 1934: 219]。おそらく、ゴーゴリはふたつのシタグマにおける朗読の速度を合わせるために意図的に脚数をそろえたのだろう。

『鼻』の最初の草稿では、日付だけで、何月かが示されていないが、ボリス・ウスペンスキー(Успенский Б.А.)は、これを「作者の不注意による間違いであろう」としている[Успенский 2004: 54]。しかし、このように日付や月を不明にする例は、ゴーゴリの『狂人日記』にも見られるので(「どんな日付もない。日付なしの日」や「日付は覚えていない。月もやはりなかった」など)、むしろ意識的な用法であろう。ここでは、イヴァン・エルマコフ(Ермаков И.Д.)が指摘しているように、23日は32年(1832年)をひっくり返した数字のアナグラムと考えることもできるかもしれない[Ермаков 1923: 189]。というのも、『鼻』は、語のレベルだけでなく、構成のレベルでも対照形をなしているからである。ヴィクトル・ヴィノグ

11 ドーリニック詩形とは、3音節の詩形でありながら、1～2個の弱音節が省略される詩形のこと。ロシア語の語は、平均すると1語あたり約3音節からなっているために、通常のロシア語の文(散文)は、弱音節と強音節の比率は約2:1になるが、もちろん、3音節以上の語もあれば2音節以下の語もある。ここでは、散文における弱音節と強音節の平均的な比率が、ドーリニック詩形の比率に極めて近いためにドーリニック詩形に喩えられている。換言すれば、ドーリニック詩形は自然なロシア語の散文に近いとも言える。

ラードフ (Виноградов В. В.) も分析しているように、「第 1 章と第 2 章は互いに対照をなしながら、〈パラレリズムの図式で〉構成されている」(「イヴァン・ヤーコヴレヴィチは、かなり早くに目を覚ました」に対して「八等官のコヴァリョーフは、かなり早くに目を覚ました」、また「イヴァン・ヤーコヴレヴィチは自分でも驚いたことに、鼻を…… 見た」に対し「コヴァリョーフは、大いに驚いたことに、そこに見たのは、鼻の代わりに (вместо)、まるっきり平べったい場所 (место) だった!」) [Виноградов 1976: 30]。後者の文では、さらに前置詞の «вместо» (～の代わりに) と名詞の «место» (場所) が対照形をなす地口として掛けられている。以上から、小説の構成そのものだけでなく、「1832 年 23 日」という日付もまた鏡映像の原理で考え出された可能性があると言えるだろう。

(2) 最初の自筆完成原稿および (3) 自筆清書原稿

Сего февраля 23 числа

(Сего февраля двадцать третьего числа)

случилось в Петербурге необыкновенно-странное происшествие.

U_ |UU | _ _ | U_ |UU |U_ ||

6 脚

U_ |UU | U_ |UU |UU |U_ |U_ |UU |UU |_UU 10脚ヤンプ(弱・強格)

(今年の 2 月 23 日に奇怪このうえない事件がペテルブルクで発生した。)

「2 月 23 日」を表す «Сего февраля двадцать третьего числа» という語順、つまり「月+日」の語順は、通常の、日付けを表す「日+月」という語順 «двадцать третьего февраля» と違って、事実を実録的に物語る新聞雑誌・社会評論の文体である。冒頭のこの文体によって語り手は、この小説の事件が実際に起きたことであるかのように読者に語りかける。ところが、この硬い文体は、それに続く、カッコ書きの挿入文で語り手が床屋の紹介をする馴れ馴れしい会話体の文「名字の方は失われてしまってるし、おまけにその看板ときたら……」と文体的に対置され、最初の草稿に比べ文体上の不一致による滑稽さが生み出されている。第一のシンタグマは 6 脚で、最初の草稿の文の 10 脚より少ないためにより大きな緊張感が生み出されている。

(4) 『現代人』

Сего Апрелья 25 числа

(Сего́ Апрелья двáдцать пя́того числá)

случи́лось в Петербу́рге необыкнове́нно-стра́нное прои́шествие.

U_ | U_ | U_ | U_ | UU | U_ | | 6脚ヤンプ (弱・強格)

U_ | UU | U_ | UU | UU | U_ | U_ | UU | UU | UU 10脚ヤンプ (弱・強格)

(今年の4月25日に奇怪このうえない事件がペテルブルクで発生した。)

ここでは、シntagemaはふたつともヤンプ (弱・強格) であり、最初の自筆完成原稿と自筆清書原稿の第一のシntagemaがスpondei (強・強節) | _ _ | を含むためにリズムを壊していたのに比べ、きわめて規則的なリズムにより音の表現力はずっと大きくなっている。

(5) 『ゴーゴリ作品集』

Ма́рта 25 числá

(Ма́рта двáдцать пя́того числá)

случи́лось в Петербу́рге необыкнове́нно-стра́нное прои́шествие.

_U | _U | _U | UU | _ | | 5脚ホレイ (強・弱格)

U_ | UU | U_ | UU | UU | U_ | U_ | UU | UU | UU 10脚ヤンプ (弱・強格)

(3月25日に奇怪このうえない事件がペテルブルクで発生した。)

この文は、他の異稿の文よりさらに大きな音の表現力をもっている。

第一に、この文だけが、ふたつのシntagemaのリズムが、ホレイ (強・弱格) とヤンプ (弱・強格) とで、対立している。どちらも2音節の韻律の対立は、ふたつのシntagemaのリズムの衝突を引き起こし、事件の日付を強調することになり、読み手、すなわち朗読する聴き手に緊張感を呼び起こす。

第二に、「*Ма́рта два́дцать пя́того числа́*」(3月25日に)は、それぞれの語の強音節がいずれもソノリティーの大きな [a] [ja] 音の母音反復であるために、ホレイのリズムにさらに大きな音の表現力が与えられ、堂々とした、あるいは威嚇するような音の連なりは、新聞雑誌・社会評論の文体の格調をさらに高めている。そのため、それに続く会話体との落差が、それ以前の異稿以上に大きくなり、滑稽さが増大している。

第三に、「*пя́того числа́ случи́лось в Петербу́рге*」(25日にペテルブルクで発生した)の語句は、5つの子音が [п] [т] + [ч] + [с] [л] と [с] [л] + [ч] + [п] [т] という3組の鏡像の組み合わせでくり返された子音反復である。オシープ・ブリーク (Брик О.М.) が考案した子音反復

の分類法 [Брик 1919: 62] にしたがってこれらの5つの子音をそれぞれ A, B, C, D, E で表記するなら、この語句は、ABCDE-DECAB という5音反復形をとることになる。そして、この子音反復が、[a] [ja] 音の母音反復を強調している。換言すれば、母音反復と子音反復が実に巧に融合することによって極めて大きな情動的表現的ニュアンスがこの文に付与されているのである。

以上のように、「*Марта двадцать пятого числа случилось...*」の文では、リズム・音の表現力や文体的表現力だけでなく、聖体礼儀の引喩や3月25日の日付けの一致による生神女福音祭の連想などすべてが奇跡的なほど見事にからみあい、一体となってこの文を極めて印象的かつ効果的で、幻想的なものとしている。いく度かの変遷を経て最終的にゴーゴリが3月25日を選択した理由も、まさにここにあると言えるだろう。

3. 各異稿における語順の変更と登場人物の名前の変更

3-1. 語順の変更

『鼻』には、冒頭の文以外にも意図的に語順を変えた文がいくつかある。これらの文がリズムや音と関係しているかどうかを検証していこう。ヴィノグラードフは、『鼻』の第1章で、鼻を発見したイヴァン・ヤーコヴレヴィチに対して妻が放つ罵詈雑言の語順の問題を別の観点からとりあげている。ここで問題にされているのは、文中における «отрезанному носу» (ちょんぎられた鼻) の位置が、本来なら動詞 «позволила» (させておく) の直後にあるはずにもかかわらず、文末という、意味上の中心となり強調される位置に置かれている点である。「シンタクス上の断片である «Чтобы я позволила у себя в комнате лежать отрезанному носу?..» (自分の部屋にころがられてるのがちょんぎられた鼻なんぞであってたまるかい.....) の語順は、しかるべき語順の文の «Чтобы я позволила отрезанному носу лежать у себя в комнате?..» (ちょんぎられた鼻なんぞに自分の部屋にころがられてたまるかい.....) の意味と決定的に違い違っている..... (中略) しかし、この文では “позволила” (кому-что) (だれそれに何かをさせておく) に対する間接補語 (だれそれに) が表されていないことと、この「させておく」という動詞が一般的に使用される場合の意味論的傾向とによって、この語

結合には、「鼻」という語彙の物的意味にゆさぶりがかけられたかのような非日常性の曖昧さという意味が付加されているのである」(下線は本稿筆者) [Виноградов 1976: 28]。つまり、ヴィノグラードフは、「ちょんぎられた鼻」の語順の入れ替えによって、この鼻がモノからそれ以上のものに変化していると主張しているのである。

しかし、もしそうであれば、その他の語順でも、つまり、「позволила」(させておく)の直後に«лежать»(ころがっている)を置き、「отрезанному носу»(ちょんぎられた鼻)を文末に置いた«Чтобы я позволила лежать у себя в комнате отрезанному носу?..»としてもよかったはずである。やはり「ちょんぎられた鼻」は文末に置かれ、レーマとして文意の中心になるからである。では、どうしてゴーゴリはそうしなかったのか。

ここで、本来あるべき語順の文のリズムを見てみよう。

«Чтобы я позво́лила отрезанному носу лежа́ть у себя́ в ко́мнате?..»

|UU | UU | _ U |UU | _ U | UU | _ U | U _ | UU | _ _ |UU

ここに一定の韻律を見出すことは難しい。

一方、『鼻』で実際に用いられた文のリズムは、

«Чтобы я позво́лила у себя́ в ко́мнате лежа́ть отрезанному носу?..»

|UU | UU _ |UU |UU _ | _ U | UU | _ U | _ U |UU | _ U

これは、次のように分解することができる。

|UU | UU _ |UU |UU _ [ピリーヒー (弱・弱格) +アナペスト (弱・弱・強格)] x 2

| _ U | UU | _ U | _ U |UU | _ U [ヤンプ+ピリーヒー (弱・弱格) +ヤンプ] x 2

つまり、まず、ピリーヒー+アナペストの組み合わせが2回くり返され、次に、ヤンプ+ピリーヒー+ヤンプの組み合わせが2回くり返されているのである。このことは、イヴァン・ヤーコヴレヴィチに対する妻の怒りの罵詈雑言が、完璧なまでに規則的なそのことばのリズムと際立った対照をなしていることを表している。つまり、不規則であるはずの感情のリズムが規則的なリズムによって表現されているというずれ、ギャップが何ともいえず笑いを呼び起こすのである。ゴーゴリがわざわざこのような語順をとったのは、まさにリズムによるずれが生み出す笑いを狙ったからであろう。

さらに他にも、妻に遠慮して朝食のコーヒーを断わるイヴァン・ヤーコ

ヴレヴィチに対して、妻が心の中で思う、規範でない語順のことばがある。

«Останется кофию лишняя порция.»

(コーヒーが、余るってもんさ、ひとり分)

これに対し、規範の語順の文とリズムは次のようになる。

«Кóфию остана́ется ли́шняя по́рция»

_UU | U_U | U_U | U_U | U 不完全なアンフィブラーヒー

(コーヒーはひとり分余るだろう)

一方、『鼻』の文とリズムは、

Остана́ется ко́фию ли́шняя по́рция

|U_U | U_U | U_U | U_U U 完全なアンフィブラーヒー (弱・

強・弱格)

ここでも、夫を見下し、まんまとコーヒーを手に入れて「しめしめ」と思う妻の感情と、それを表現する詩的で美しい規則的なリズムとのずれが、笑いを引き起こしている。

3-2. 登場人物の名前の変更

『鼻』では、日付だけでなく、いくつかの登場人物の名前や父称も草稿の段階で変更されている。これらを音の観点から考察してみよう。床屋の«Иван Яковлевич»(イヴァン・ヤーコヴレヴィチ)は最初の自筆完成原稿では«Иван Федорович»(イヴァン・フョードロヴィチ)と名づけられていた。この«Федорович»(フョードロヴィチ)という父称は第1章で10回もくり返されていながら、突然«Яковлевич»(ヤーコヴレヴィチ)に取って代わられる。ところが、この父称変更の問題はこれまでまったく研究されていない。この変更の箇所を詳細に分析してみよう。ゴーゴリは、最初の自筆完成原稿で当初この箇所をこう記していた。

«Но я виноват: давно бы следовало кое-что сказать об Иване Федоровиче, человеке...»

(しかし、この人物、イヴァン・フョードロヴィチについて、今の今まで何も語らなかつたのは、いささか私の落ち度である)

しかし、ゴーゴリは、原稿の«Федоровиче»(フョードロヴィチについて)に線を引いて消し、その行の上に«Яковлевиче»(ヤーコヴレヴィチについて)と書き込んでいる。ここで、父称を含む語結合の«Федоровиче, человеке»(こ

の人物、フョードロヴィチについて)と«Яковлевиче, человеке»(この人物、ヤコヴレヴィチについて)を音の観点から比較検討してみよう。

«Федоровиче, человеке»をそれぞれ子音と母音に分解すると、
 «Федоровиче»は：[ф] [л] [р] [в] [ч] と [ě] [о] [и] [е]、
 «человеке»は： [ч] [л] [в] [к] と [е] [о]

に分けられるが、このふたつの語の音に共通性はほとんど見られない。

一方、«Яковлевиче, человеке»では、

«Яковлевиче»は：[к] [в] [л] [ч] と [я] [о] [е] [и]、
 «человеке»は： [ч] [л] [в] [к] と [е] [о]

に分解されるが、このふたつの語には明らかな音の共通性(子音反復)が見られる。「Яковлевиче»を構成する[к] [в] [л] [ч]と[я] [о] [е] [и]には«человеке»を構成する[ч] [л] [в] [к]と[е] [о]のすべての音が含まれている。つまり、[к] [в] [л] [ч]を反転させると[ч] [л] [в] [к]になり、さらに[е] [о]を加えると[ч] [е] [л] [о] [в] [е] [к] (人)の音が立ち上がるのである。明らかにゴーゴリは、「человеке」と書いた時点で、この語と«Яковлевиче»との音の相似に気がつき、「Федоровиче»を«Яковлевиче»に変更したのであり、この子音のアナグラムによって大きな共鳴と笑いを得ることに成功している。

さらに遡ると、最初の草稿でも床屋の父称は途中で変更されている。冒頭では«Иван Иванович»(イヴァン・イヴァーノヴィチ)と名づけられていたが、次に挙げる文の後で«Иван Федорович»に変えられたのである。

«А дай-ка я вместо кофию, да съем горячего хлеба»(ボールド体は本稿筆者)(コーヒーの代わりに熱々のパンを食べることにするよ)

この文から抽出できる、ボールド体で示した[в] [е] [о] [ф] [и] [л] [р] [ч]という音を並び替えると、[ф] [е] [л] [о] [р] [о] [в] [и] [ч](フョードロヴィチ)が得られるのである。

さらに同様の例は、「Подточина»(ポドトーチナ)佐官夫人の場合にも見られる。ポドトーチナ夫人の名は、最初の草稿と最初の自筆完成原稿にはなく、ただ佐官夫人と呼ばれており、『現代人』と『ゴーゴリ作品集』ではじめて登場する。この作品のはじめの方ではポドトーチナ佐官夫人の名前と父称は«Палагея Григорьевна»(パラゲーヤ・グリゴリエヴナ)と記されているが、コヴァリョフがポドトーチナ佐官夫人に手紙を書くくだりで、突

然呼びかけが「Александра Григорьевна」（アレクサンドラ・グリゴリーエヴナ）に変えられている。この名前の変更に関してもこれまでしかるべき研究がなされたことはない。1994年版のゴーゴリ選集では、この件に関して「アレクサンドラ・グリゴリーエヴナ：既出のとおりゴーゴリは彼女のことをパラゲーヤ・グリゴリーエヴナと名づけていた」という注が添えられているだけで、変更の理由については述べられていない [Гоголь т. 4, 1994: 491]。また、アレクセイ・ドゥナーエフ（Дунаев А.Г.）は、これを「この作品の場合（他の作品とは違って）ゴーゴリが登場人物たちの名前に（少なくとも特別な）意味を与えていなかったために引き起こされた、ゴーゴリの見落としである」と見なしている [Дунаев 1998:426]。しかし、ゴーゴリが、こと『鼻』だけに限って登場人物の名前に注意を払わず、また『現代人』や『ゴーゴリ作品集』の編集者たちもこの間違いを見落としていたということがありうるだろうか。この理由を解明するためにコヴァリョフがポドトーチナ夫人に宛てた手紙の冒頭を分析してみよう。この手紙は呼びかけで始まる。

«Милостивая государыня, Александра Григорьевна» (敬愛するアレクサンドラ・グリゴリーエヴナ様)

この呼びかけの中で使われる «государыня»（貴女様）という語からは、子音の [r] [c] [ɲ] [p] [n] と母音の [o] [y] [a] [ы] [я] を抽出することができ、これらの子音と母音の [a] を並び替えると [a] [c] [a] [n] [ɲ] [p] [a] という音ができる。これはほとんど «Александра» と同じ音である。恐らく、ゴーゴリはこの手紙の呼びかけの部分を書いているときに «государыня» と «Александра» の共鳴に気づき、宛名のポドトーチナの名前を変えながら、その一方で意図的に手紙以前のテキストには «Палагея» の名前をそのまま残すことによって、コヴァリョフがこの佐官夫人に対して注意を払っていないことを示そうとしたのではないだろうか。すなわち、ポドトーチナ夫人は、自分の娘をコヴァリョフに嫁がせたいと考えていたが、コヴァリョフにはその気はさらさらなく、ただ弄んでいるだけであり、ゴーゴリはポドトーチナの名前を変更することによって、この呼びかけの語句の中に地口とポドトーチナ夫人に対するコヴァリョフの軽蔑の念を同時に盛り込んだのだろう。

4. 『鼻』の構成におけるリズム

『鼻』は3つの章からなっている。第1章で、イヴァン・ヤーコヴレヴィチは朝食のパンの中にコヴァリョフの鼻を見つけ、第2章で、コヴァリョフは自分の鼻を失くしたことに気づいて鼻を探し回り、第3章で、鼻は突然もとの場所に戻る。

リズムの観点からそれぞれの章の冒頭の文を分析してみよう。

(1) 第1章：

«Марта 25 числа случилось в Петербурге необыкновенно-странное происшествие».

(3月25日に奇怪このうえない事件がペテルブルクで発生した。)

既述のように、この文はホレイ(強・弱格)とヤンプ(弱・強格)からなっている。

(2) 第2章：

«Коллѣжский ассѣссор Ковалѣв просну́лся дово́льно ра́но
и сде́лал губа́ми: «бrr...»

U_U|U_U|UU_|U_U|U_U|U|| 主にアンフィブラーヒー(弱・強・弱格)

U_U|U_U 明らかなアンフィブラーヒー

(八等官のコヴァリョーフは、かなり早くに目を覚まし、
唇あわせて「ぶるる……」とやった。)

この文は、ほぼ完全なアンフィブラーヒー(弱・強・弱格)でできており、文の内容と見事に重なり合っている。すなわち、この文のあと、コヴァリョーフは自分でもなぜだか分からないが、毎朝起きぬけに「ぶるる」とやる習慣があるという語り手の説明が続くが、この「ぶるる」という人を威嚇する音を、だれもいないのに威張り散らしながら立てるという滑稽な習慣が、反復される規則的なアンフィブラーヒーのリズムによって見事に浮かび上がり、滑稽さが倍増されているのである。

(3) 第3章：

«Чепуха соверше́нная де́лается на све́те»

UU_|UU_|UU_|UUU|U_U|| 主にアナペスト(弱・弱・強格)とアンフィブラーヒー

(まったくのばかげたことが起きるもの、この世には)

この文は、完全な倒置文である。前述のとおり、巻頭文は、一般的に状況限定詞を含む文脈非依存型不分割文であり、その中立語順は、「状況限定詞グループ+述語グループ+主語グループ」となるはずである。すなわち、

«На свете делается совершенная чепуха» (この世にはまったくのばかげたことが起きるもの)

というのが通常の文であるはずだが、第3章の巻頭文は「主語+述語+状況限定詞」という正反対の語順がとられている。その結果、主語の「まったくのばかげたことが」が特に強調され、文全体から大きな表現力が引き出されているのと同時に、中立語順の文とのずれの感覚が読み手・聴き手に呼び起こされる。さらに、この文のリズムは、ほぼアナペストで揃っており(UU_|UU_|UU_|UUU|U_U)、「ばかげたことが起る」という内容とこの規則的なリズムとの間にもずれが生じている。このような語順のずれと内容・リズムとのずれは、読み手・聴き手に幻想的な気分を呼び起こすことになるだろう。そして、この幻想性は、このあと、何の前触れもなく、突然鼻がもとの場所、つまりコヴァリョフの顔に戻るという幻想的な出来事へと見事に連なっているのである。一方、中立語順の文の場合は、リズム(U_U|_UU|UUU|_UU|UU_)はそれほど規則的でないのでこのようなずれの感覚を引き起こすことがない。ゴーゴリがわざわざこのような完全倒置語順をとったのは、まさにリズムによるずれが生み出す幻想性を狙ったからであろう。

以上のように、すべての章は、その冒頭が、いずれも、それぞれ一定のリズム形式をとることによって、互いに有機的に結合されている。

5. 結び

以上のように、『鼻』は、語のレベルから、文(語順)のレベル、さらに構成のレベルに至るまで、音律法や音の反復などの音(共鳴)とリズムの原理に基づいて作られている。ときには、不規則であるはずの感情のリズムが規則的なリズムによって表現されるというずれが、何ともいえない笑いと呼び起こすこともある。このように、音(共鳴)とリズムは、語や文や小説の構成全体において文体的な調和や、またその反対に衝突を引き起

こし、それによって、読み手、すなわちテキストを朗読する聴き手に笑いや緊張感や幻想性を呼び起こすことに成功している。また、いくつかの異稿を経て最終的に選ばれた事件の日付3月25日「Марта двадцать пятого числа」は、リズム・音の表現力や文体的表現力だけでなく、聖体礼儀の引喩やこの日付けとの一致による生神女福音祭との連想などすべてが奇跡的なほど見事からみあった日付であった。さらに、原稿や完成テキストでさえ登場人物の名前や父称が変更されているのも、共鳴の効果を引き出すためであった。ゴーゴリが、最初の自筆完成原稿で「человеке」と書いてからその直前の語「Федоровиче」を「Яковлевиче」に変更したのも、「человеке」と「Яковлевиче」との音の相似に気がついたからであり、この「音のアナグラム」によって大きな共鳴を得ることに成功したのだった。

このように、『鼻』では、入念に選択されたリズムや音などのシニフィアンが、それらによって再構築されるシニフィエとずれて激しく衝突するとき、その落差のダイナミズムは強烈な笑いや幻想の世界を呼び起こし、逆に、シニフィアンとシニフィエがぴったり一致するとき、そのシニフィエがもつダイナミズムは増幅し、読み手・聴き手にシニフィエを、現実を超えた現実として感知させる。『鼻』のリズムと音が織りなす世界は、不協和音と協和音を繰り返しながら、幻想と現実の巨大な振幅の中に読み手・聴き手を引きずり込むのである。

ゴーゴリ作品のおもしろさ、意外さ、奥深さは、黙読では決して得ることができない。それは、読者自身が語り手となってテキストを朗読してはじめて体験できるものなのである。ゴーゴリにとって、音とリズムは単なる手法をはるかに超えた、作品の本質そのものである。

Список использованной литературы

1. *Белый А.* Мастерство Гоголя: Исследование. — М.; Л., 1934.
2. Библия: Книги Священного писания Ветхого и Нового Завета (в русском переводе с параллельными местами и приложениями). — 2006
3. *Брик О.М.* Звуковые повторы // Поэтика: Сборники по теории поэтического языка. — Пг., 1919
4. *Вайскопф М.Я.* Сюжет Гоголя: Морфология, идеология, контекст. — М., 2002.
5. *Виноградов В. В.* Натуралистический гротеск: Сюжет и композиция повести Гоголя «Нос». — В кн.: Поэтика русской литературы. М., 1976.
6. *Гиришман М.М.* Ритм художественной прозы. — М., 1982.
7. *Глянц В.М.* Гоголь и апокалипсис. — М., 2004.
8. *Гоголь Н.В.* Черновой набросок начала повести «Нос» из записной тетради, принадлежавшей И.С. Аксакову. Российская национальная библиотека в СПб.
9. *Гоголь Н.В.* Автограф из древлехранилища Погодина («Нос». Автограф Н.В. Гоголя) на семи страницах листового формата. Российская национальная библиотека в СПб.
10. *Гоголь Н.В.* Беловой автограф начала повести «Нос». Российская национальная библиотека в СПб.
11. *Гоголь Н.В.* Нос // Современник. — СПб., 1836. — №3. — С. 54-90.
12. *Гоголь Н.В.* Сочинения Николая Гоголя. — Т. 3. — СПб., 1842.
13. *Гоголь Н.В.* Полное собрание сочинений в 14 т. — М. Л., 1937-1952
14. *Гоголь Н.В.* Николай Васильевич Гоголь. Собрание сочинений в девяти томах. — М., 1994.
15. *Дилакторская О.Г.* Фантастическое в повести Н.В. Гоголя «Нос» // Русская литература. — Л., 1984. — №1. — С.153-166.
16. *Дунаев А.Г.* Гоголь как духовный писатель: Опыт нового прочтения «Петербургских повестей» // Искусствознание. — М., 1998. — №1. — С. 391-427.
17. *Ермаков И.Д.* Очерки по анализу творчества Н.В. Гоголя. — М., Пг., 1923

18. *Каравашкин А.В., Юрганов А.Л.* Опыт исторической феноменологии. Трудный путь к очевидности. М., 2003.
19. Русская грамматика Т. 2 : Синтаксис. – М., Академия наук СССР. – 1980.
20. *Успенский Б.А.* Время в гоголевском «Носе» («Нос» глазами этнографа). — В кн.: Историко-филологические очерки. – М., 2004.
21. *Эйхенбаум Б. М.* Как сделана «Шинель» Гоголя // О прозе: Сб. статей. – Л., 1969. – С. 306-326.
22. Энциклопедический словарь российской жизни и истории XVIII – начало XX в. – М., 2003
23. 日本正教会翻訳『我主イイススハリストスの新約』（正教会版）1985年